

## E-2

### 日本手話(愛媛方言)における接続詞としての非手指表現(NMM)について\*

上田由紀子 (山口大学)

[ykueda@yamaguchi-u.ac.jp](mailto:ykueda@yamaguchi-u.ac.jp)

内堀朝子 (東京大学)

[uchibori@cce.t.u-tokyo.ac.jp](mailto:uchibori@cce.t.u-tokyo.ac.jp)

#### 要旨

本発表では、日本手話の愛媛方言における接続詞としての非手指表現(NMM)に着目し、以下 i)~iv)の4種類の接続詞について、それぞれの頭の動き・接続要素の範疇などを報告する。i)首・あごが下まで下りきらないで頭が止まる頷きは、名詞句の等位接続詞として、各接続要素の終わりごとに生じる。ii)いわゆる頷き、すなわち首・あごを下まで下ろす頭の動きは、CPの等位接続詞となる。接続要素内には話題化要素やアスペクト要素を含むことができ、接続要素としてWH疑問文も生起できる。iii)形態的にi)と同じものが、付帯状況を表わすVPの主節への従属接続詞として機能する。接続要素内に話題化要素やアスペクト要素を含むことはできず、接続要素としてWH疑問文は生じない。iv)ロールシフト(RS)が生じる領域どうしを接続する頭の動きで、接続要素に[+RS]素性を必要とする。第一接続要素では目的語では任意だが動詞からは義務的にRS領域となり、後続する接続要素は必ずRS領域から始まる。

#### 1. はじめに

- (1) JSLにおいて、非手指表現(以下、NMM)である頭の動きが接続詞として機能する。
- (2) 「日本手話の語順は、頭の動きに着目することによって初めて正しく分析できる。要素間のより詳細な関係は、必要に応じて機能語(接続詞)によって標示されるが、その場合にも頭の動きは省略できない。日本手話の文構造を示す第一義的な標識は、あくまで頭の動きなのである」(市田(2005c: 98))
- (3) JSLの従属接続節には、条件「(もし)～なら」、順接「～ので」、逆接「～のに」、時間の前後を表わす副詞節「～前/後」などに対応して、それぞれ異なる頭の動きが生じる(「前/後」は対応する手指表現がある)。(堀内他(2008), 市田(2005c), 岡・赤堀(2011), 松岡(2015)など)<sup>1</sup>
- (4) 【文脈】月曜日の朝、クラスメートと、日曜のことについて、おしゃべりしているところ。
- (5) YESTERDAY FRIEND THREE-CL HOME DRINK MEETING DO <sup>hn-PURPOSE</sup> SHOPPING GO  
'昨日、友達3人で、家で飲み会するために、買い物に行った'
- (6) JSL(愛媛方言)で、目的「～ために」を表わす節の終わりに、頭の振りかぶりが大きく、首を下まで下ろす頷き(ここでは、*hn-PURPOSE*と仮に表記)が生じる。
- (7) 文の等位接続では「非頭在的接続詞」の存在が仮定される。(小谷(2009: 34))
- (8) [CP HE I SEE] [CP SHE I SEE]  
'彼と彼女が私を見る' (小谷(2009: 35(3))表記改変、日本語訳は原文のまま)
- (9) 文や述語の並列で、頷きが非頭在的な場合と頭在的な場合では意味・統語構造が異なる。(浅田(2019:22-23)(脚注12を参照))

\* 本研究にご協力いただいた日本手話ネイティブサイナーの方に、深く感謝申し上げます。本研究はJSPS科研費JP21K00528(研究代表者: 上田由紀子)及びJSPS科研費JP21K00499(研究代表者: 内堀朝子)の助成を受けた。

<sup>1</sup> JSLの頭の動きの役割について指摘した研究としては米川(1984), 市田(1994)があるが、本研究内容には直接の関連がないため、ここでは言及しない。

(10) 本研究の目的：従来頷きと記述されてきた顕在的接続表現としての頭の動きには、複数の異なる種類が存在する事実を観察し、そのうち4種類についてそれぞれの接続要素の統語的性質に違いがあることを報告する。

## 2. 日本手話（愛媛表現）における名詞句の等位接続

(11) 「非顕在的接続詞は名詞句を等位項としない」（小谷(2009: 35)）

(12) 名詞が並列した場合、間に *hn* がなければ所有関係、*hn* が入ると等位接続として解釈される。（岡・赤堀(2011: 50)）

(13) PT<sub>1</sub><sup>2</sup> SISTER HAWAII GO (発表者による岡・赤堀(2011)動画 P50-01 書き起こし)

‘私の妹が、ハワイに行く’

<https://www.bbed.org/com/sikumi/chapter2/meisi/>

hn-STOP(NP) hn-STOP(NP)<sup>3</sup>

(14) PT<sub>1</sub> SISTER HAWAII GO (発表者による岡・赤堀(2011)動画 P50-02 書き起こし)

‘私と妹が、ハワイに行く’

<https://www.bbed.org/com/sikumi/chapter2/meisi/>

(15) 名詞句どうしの等位接続は、動作の最後で頭が止まる頷き（首を下まで振りきらない頷き）（以下、*hn-STOP(NP)*<sup>4</sup>）が、接続要素である名詞句ごとの後半に同時に生起することにより、示される。

(16) JSL(愛媛方言)における *hn-STOP(NP)*

➤ 名詞句どうしの等位接続詞

(17) [<sub>NP1</sub> ... N<sub>1</sub>] [<sub>NP2</sub> ... N<sub>2</sub>]

## 3. 日本手話（愛媛表現）における節の等位接続

(18) 【文脈】私と妹の会話。夜に家で、家事・食事・お風呂その他が全部終わって、これから自由時間。

(19) 妹の質問：PT<sub>2</sub> SLEEP TILL DO WHAT<sup>WH</sup> ‘寝るまであなたは何をする?’

(20) 私の答え1：SLEEP TILL MANGA READ (hn) ‘寝るまでマンガ読む’

(21) 主文の文末に、首を下まで降り下ろす頭の動き（以下、*hn*）が任意に現われる<sup>6</sup>。

(22) 文末に生起する *hn* の構造上の位置は、文末指さしの生起位置<sup>7</sup>と競合する。→CP 領域の可能性

(23) a. SLEEP TILL MANGA READ PT<sub>1</sub> ‘寝るまでマンガを読む’

b. \*SLEEP TILL MANGA READ hn PT<sub>1</sub> c. \*SLEEP TILL MANGA READ PT<sub>1</sub> hn

d. SLEEP TILL MANGA READ hn PT<sub>1</sub> (PTを出して頷き、頷きの間はPTは残っている)

<sup>2</sup> PTは指さしを表わす。手話言語の指さしは代名詞として機能するが、人称素性の有無や種類については議論が分かれている(Cormier(2012))。本発表では1/2/3人称の人称素性を仮定して、表記している。

<sup>3</sup> 二つ目の *hn-STOP(NP)* は音韻的に弱形となることもあるが、義務的である。

<sup>4</sup> JSLにおける名詞句構造の詳細は定かではないため、ここではNPと記述しておく（名詞句内の指さしの生起位置に基づくDP分析の可能性については、Uchibori(2018)参照）。

<sup>5</sup> 本発表では、以下、等位接続構造の全体や *hn* が主要部となる句（例えば *hnP*）の有無などの詳細については踏み込まない。内堀・上田(2022)で、Chomsky(2021)に基づいた等位接続構造の派生を検討する。

<sup>6</sup> *hn* がある場合、確認のようなニュアンスが加わるという内省の報告もあった。

<sup>7</sup> Uchibori(2018)は、語順から主文の文末指さしがC主要部に生起するとしている。Uchibori and Matsuoka(2013)は、文末指さしが、文末WH要素に後続し、Q-NMMと共起する例(JSLの別の方言)に基づき、C主要部の1つであるForce<sup>0</sup>に位置すると仮定している。

- (24) (19)の私の答え 2 :  $\overline{\text{TOP}}^8$  PT<sub>1</sub> MANGA READ  $\overline{\text{hn}}$  SOMETHING EAT<sup>9</sup> ‘私はマンガを読む、そして何かを食べる’
- (25) 【文脈】私はあなたと、話をしている。この場にいない、共通の友人女性がいる。3人とも果物が好きで毎日、食べる。各自が食べたものの話をしている。
- (26)  $\overline{\text{TOP}}$  YESTERDAY PT<sub>2</sub> APPLE EAT ASP<sub>PERFECTIVE</sub>  $\overline{\text{hn}}$   $\overline{\text{TOP}}$  PT<sub>3</sub> BANANA EAT ASP<sub>PERFECTIVE</sub><sup>10</sup>  
 ‘昨日、あなたはリンゴを食べ終わった、そして彼女はバナナを食べ終わった’
- (27) a. *hn* の左右は、話題化要素（時間表現、主語など）やアスペクト要素を含む領域=CPである。  
 b. *hn* の左右は i)等位接続要素である CP なのか、あるいは、ii)独立した主文としての CP なのか？
- (28) (24)に続く妹の質問 :  $\overline{\text{TOP}}$  PT<sub>2</sub> MANGA READ  $\overline{\text{hn}}$  EAT  $\overline{\text{WH}}$  WHAT ‘あなたはマンガを読む、そして何を食べるの?’
- (29) They’ve finished the job, but why did they take so long? (岸本他 2019:129(26ib))
- (30) (=29) [CP [CP<sub>1</sub> C<sub>1[-Q]</sub> [IP ... ] ] & [CP<sub>2</sub> WHY C<sub>2[+WH]</sub> [IP ... (WHY) ... ] ]]
- (31) (19)の私の答え 3 :  $\overline{\text{TOP}}$  PT<sub>1</sub> SOMETHING READ  $\overline{\text{hn}}$  FRUITS EAT ‘私は何かを読む、そして果物を食べる’
- (32) (31)に続く妹の質問 :  $\overline{\text{TOP}}$  PT<sub>2</sub> READ  $\overline{\text{WH}}$  WHAT  $\overline{\text{hn}}$  FRUITS EAT ‘(lit.)あなたは何を読むの、そして果物を食べる’
- (33) (19)の私の答え 4 :  $\overline{\text{TOP}}$  PT<sub>1</sub> SOMETHING READ  $\overline{\text{hn}}$  SOMETHING EAT ‘私は何かを読む、そして何かを食べる’
- (34) (33)に続く妹の質問 :  $\overline{\text{TOP}}$  PT<sub>2</sub> READ  $\overline{\text{WH}}$  WHAT  $\overline{\text{hn}}$  EAT  $\overline{\text{WH}}$  WHAT ‘あなたは何を読むの、そして何を食べるの’
- (35) 【文脈】私とあなた、友達どうしでお喋り。昨日、近所の中華料理店「餃子の王将」からテイクアウトして食べたものの話をしている。
- (36) 友人の質問 : YESTERDAY ‘DUMPLING-GEN OSHO’ BUY  $\overline{\text{hn}}$  EAT  $\overline{\text{WH}}$  WHAT  
 ‘昨日「餃子の王将」で何を買って食べたの’
- (37) (28)(32)(34)(36)の文法性から、*hn* は、それ自身の節タイプを標示する C を持つ独立の CP どうしを等位接続する接続詞と言える。
- (38) (=28) [<sub>?</sub> [CP<sub>1</sub> [IP ... ] C<sub>1[-Q]</sub> ]  $\overline{\text{hn}}$  [CP<sub>2</sub> [IP ... (WHAT) ... ] [C<sub>2[+WH]</sub>  $\overline{\text{WH}}$  WHAT<sup>11</sup> ] ] ] 第二接続要素 CP 内の WH 移動
- (39) (=32) [<sub>?</sub> [CP<sub>1</sub> [IP ... (WHAT) ... ] [C<sub>1[+WH]</sub>  $\overline{\text{WH}}$  WHAT] ]  $\overline{\text{hn}}$  [CP<sub>2</sub> [IP ... ] C<sub>2[-WH]</sub> ] ] 第一接続要素 CP 内の WH 移動
- (40) (=34) [<sub>?</sub> [CP<sub>1</sub> [IP ... (WHAT) ... ] [C<sub>1[+WH]</sub>  $\overline{\text{WH}}$  WHAT] ]  $\overline{\text{hn}}$  [CP<sub>2</sub> [IP ... (WHAT) ... ] [C<sub>2[+WH]</sub>  $\overline{\text{WH}}$  WHAT] ] ] 両接続要素 CP 内の WH 移動
- (41) (=36) [<sub>?</sub> [CP<sub>1</sub> [IP ... (WHAT) ... ] C<sub>1[+WH]</sub> ]  $\overline{\text{hn}}$  [CP<sub>2</sub> [IP ... (WHAT) ... ] C<sub>2[+WH]</sub> ]  $\overline{\text{WH}}$  WHAT ] 両接続要素内からの ATB
- (42) CP どうしの等位接続は、*hn* で標示する。

<sup>8</sup> TOP は、話題化を表す NMM (目の見開き、眉上げ、話題の終わりの頷き、短い間) を表す。話題化標識に含まれる頭の動きは、*hn-STOP (NP)*(16)と同じではなく *hn* (43)と類似しており、あご・首が下まで下りていると観察される。

<sup>9</sup> 以降の *hn* を含む例では、接続要素内に RS が任意に生起することができるが、ここでの議論には影響がない。接続要素内に RS が生起する場合および RS を含む領域どうしの接続については、5 節を参照。

<sup>10</sup> ASP<sub>PERFECTIVE</sub> は語彙動詞 FINISH と同じ形態を持つが、ここでは松岡(2015:79)に従い「アスペクトを表わす形態素」すなわちアスペクト要素と考える。なお完了相を示すには、その他に動詞に口型 PA を共起させる方法もある。

<sup>11</sup> JSL の WH 疑問文において、手指表現と NMM の 2 つの形態素からなる WH 要素が C<sub>0[+WH]</sub>へ移動する分析について、詳しくは Uchibori and Matsuoka (2016)を参照。

(43) JSL(愛媛方言)における *hn*

➤ 節領域 (話題化要素(主語・時間表現)・アスペクト要素を含む)=CP どうしの等位接続詞<sup>12</sup>

(44) [<sub>?</sub><sup>13</sup> [CP<sub>1</sub> [IP ... ] C<sub>1</sub> ] <sup>hn</sup> [CP<sub>2</sub> [IP ... ] C<sub>2</sub> ] ]

#### 4. 日本手話 (愛媛表現) における動詞句の従属接続

(45) (19)に対する私の答え 4 : PT<sub>1</sub> MANGA READ <sup>hn-STOP(VP)</sup> SOMETHING EAT<sup>14</sup>

‘私はマンガを読みながら、何かを食べる’

(46) 述部どうしは、動作の最後で頭が止まる領き (首を下まで振りきらない領き)<sup>16</sup> (以下、*hn-STOP(VP)*)が接続する。

(47) a. (=20) 私の答え : SLEEP TILL MANGA READ <sup>(hn)</sup> ‘寝るまでマンガ読む’

b. 私の答え : \*SLEEP TILL MANGA READ <sup>hn-STOP(VP)</sup> ‘寝るまでマンガ読む’

(48) *hn-STOP(VP)* は、文末指さし (脚注7参照) と共起しない。→CP 領域に生起するものではない

(49) a. \*SLEEP TILL MANGA READ <sup>hn-STOP(VP)</sup> PT<sub>1</sub> ‘寝るまでマンガを読む’

b. \*SLEEP TILL MANGA READ PT<sub>1</sub> <sup>hn-STOP(VP)</sup> c. \*SLEEP TILL MANGA READ PT<sub>1</sub> <sup>hn-STOP(VP)</sup>

(50) ??PT<sub>1</sub> MORNING SHOWER <sup>hn-STOP(VP)</sup> APPLE EAT ‘私は朝シャワーを浴びながら、リンゴを食べる’

(51) PT<sub>1</sub> MORNING SHOWER <sup>hn-STOP(VP)</sup> ‘TO BRUSH TEETH’ ‘私は朝シャワーを浴びながら、歯を磨く’

(52) *hn-STOP(VP)* は、主節と独立した出来事を表わす句・節を接続していない。→動詞句<sup>17</sup>を接続

(53) \*YESTERDAY <sup>TOP</sup> PT<sub>2</sub> APPLE EAT ASP<sub>PERFECTIVE</sub> <sup>hn-STOP(VP)</sup> PT<sub>3</sub> BANANA EAT ASP<sub>PERFECTIVE</sub> <sup>TOP</sup>

‘\*昨日、あなたはリンゴを食べ終わりながら、彼女はバナナを食べ終わった’

(54) YESTERDAY <sup>TOP</sup> PT<sub>2</sub> APPLE EAT ASP<sub>PERFECTIVE</sub> <sup>hn</sup> PT<sub>3</sub> BANANA EAT ASP<sub>PERFECTIVE</sub> (= (26))

‘昨日、あなたはリンゴを食べ終わった、そして彼女はバナナを食べ終わった’

(55) *hn-STOP(VP)* の接続要素は、話題化要素やアスペクトを含まない →接続要素の範疇 ≠ CP/IP

(56) (33)に続く妹の質問 : \*PT<sub>2</sub> READ <sup>WH</sup> WHAT <sup>hn-STOP(VP)</sup> EAT <sup>WH</sup> WHAT

‘あなたは何を読みながら、何を食べるの’

<sup>12</sup> 浅田(2019:23)は、浅田(2019:22(10b)) (=以下(i))の例で「...二つの動詞句を接続する領きが顕在的な場合には「太郎が料理したものを花子が食べる」という解釈が可能である...」と述べているが、浅田の言う「領き」がここでの *hn* と同じ NMM ならば、その解釈は、独立した CP の表わす2つのイベントが続いた結果としてもたらされる解釈であり、ここでの分析と合致する。

(<sup>head nod</sup>)

(i) YESTERDAY [TARO COOK] [HANAKO EAT] (浅田(2019:22(10b))表記改変)

<sup>13</sup> 脚注5を参照。

<sup>14</sup> *hn-STOP(VP)* は、音韻的に *READ* の後半で手指と同時に生起する必要がある。

<sup>15</sup> 以降の *hn-STOP(VP)* を含む例では、接続要素内に RS が任意に生起することができるが、ここでの議論には影響がない。接続要素内に RS が生起する場合および RS を含む領域どうしの接続については、5節を参照。

<sup>16</sup> この頭の動きは、*hn-STOP(NP)* と同じである。

<sup>17</sup> VP か vP かについては、さらなる検証を必要とする。ここでは動詞句と記述しておく。

(57) (19)に対する私の答え 5 :  $\overline{\text{TOP}}$  PT<sub>1</sub> SOMETHING READ  $\overline{\text{hn-STOP(VP)}}$  FRUITS EAT  
 ‘私は何かを読みながら、果物を食べる’

(58) (57)に続く妹の質問 1 : \*PT<sub>2</sub> READ  $\overline{\text{WH}}$  WHAT  $\overline{\text{hn-STOP(VP)}}$  FRUITS EAT  
 ‘あなたは何を読みながら、果物を食べるの?’ → 接続要素の範疇 ≠ CP

(59) PT<sub>2</sub> READ  $\overline{\text{WH}}$  WHAT  $\overline{\text{hn}}$  FRUITS EAT ‘(lit.)あなたは何を読むの、そして果物を食べる’ (= (32))

(60) (=58) \*<sub>2</sub> [CP [IP... (WHAT) ... V ...] C<sub>[+WH]</sub>  $\overline{\text{WH}}$  WHAT] [CP/IP/VP ...]

(61) 動詞句の主節への接続は、動作の最後で頭が止まる領き (首を下まで振りきらない領き) (以下、hn-STOP(VP)) が、接続要素である動詞句の動詞後半に同時に生起することによって標示される<sup>18</sup>。

(62) (57)に続く妹の質問 2 : \*PT<sub>2</sub> READ  $\overline{\text{hn-STOP(VP)}}$  FRUITS EAT  $\overline{\text{WH}}$  WHAT  
 ‘あなたは何を読みながら、果物を食べるの?’

(63) (=62) \*<sub>CP</sub> [IP ... [VP ... (WHAT) ... V]  $\overline{\text{hn-STOP(VP)}}$  ... V] C<sub>[+WH]</sub>  $\overline{\text{WH}}$  WHAT] → 付加詞の島制約に従う<sup>19</sup>

(64) (45)に続く妹の質問 : PT<sub>2</sub> MANGA READ  $\overline{\text{hn-STOP(VP)}}$  EAT  $\overline{\text{WH}}$  WHAT  
 ‘あなたはマンガを読みながら、何を食べるの?’

(65) (=64) [<sub>CP</sub> [IP ... [VP<sub>1</sub> ... V]  $\overline{\text{hn-STOP(VP)}}$  ... (WHAT) ... V] C<sub>[+WH]</sub>  $\overline{\text{WH}}$  WHAT]<sup>20</sup> → 主節 CP 内 WH の文末への移動

(66) (62)(64)の対比から、hn-STOP(VP) は、動詞句を主節に付加する従属接続詞と言える。

(67) JSL(愛媛方言)における hn-STOP(VP)

- ▶ hn-STOP(VP) : 動詞句領域 (話題化要素 (主語) ・アスペクトを含まず、主節と独立した出来事を表わさない) の主節への従属接続詞/動詞句以上の領域 (CP, IP) は接続できない

(68) [<sub>CP</sub> ... [VP ... V]  $\overline{\text{hn-STOP(VP)}}$  ... V ... I ... C]

## 5. 日本手話 (愛媛表現) における RS を含む領域の接続

(69) 【文脈】私と妹の会話。夜に家で、仕事や家事・食事・お風呂などが全て終わり、これから自由時間。

(70) (19)に対する私の答え 6 : PT<sub>1</sub> MANGA READ  $\overline{\text{RS}}$   $\overline{\text{hn-RS}}$  SOMETHING EAT  $\overline{\text{RS}}$   
 ‘私は、「マンガ読むよ〜」「何か食べるよ〜」’

(71) Role shift (RS): “... the signer presents another’s words, thoughts, or “point of view.” (Sandler and Lillo-Martin (2006: 379))

(72) サイナーは通常、頭を正面 (対話の相手の方向) に向けて、普通の目の開きから視線を対話の相手に向かわせる。一方、RS の生起範囲では、視線や頭の位置のシフトが生じる。(市田(2005b), 岡・赤堀

<sup>18</sup> 動詞句の接続先の領域については、さらに検討を要する。接続先は顕在的主語より下 (語順として右) に見えるので、JSL で顕在的主語が IP に上がっていれば IP 領域内かそれ以下、vP にとどまっていれば vP 領域内かそれ以下にあると考えられるが、顕在的主語位置がどこであるかを含め、不明である。

<sup>19</sup> 話題化でも同様に、hn-STOP(VP) が標示する付加詞から文頭への話題化ができない。スペースの都合により例文とその文脈は省略する。

<sup>20</sup> 話題化でも、ここでの分析通り、hn-STOP(VP) が標示する付加詞内から文頭へ話題化要素を動かすと容認度が落ちる。しかし、主節 CP 内要素が文頭へ、hn-STOP(VP) が標示する付加詞を線状的に飛び越えて話題化移動する場合、予測と異なり容認度が下がる。この点はさらなる検討が必要であるが、この他に、話題化要素が関係節を含む名詞句を線状的に飛び越えても容認度が落ちる事実が見られ、話題化に関する独立の制約が要因となっている可能性もある。

(2011), 松岡(2015), 川崎(2021)) (以下, RS を標示するそれらの NMM を *RS* と表記)

(73) RS が続くとき, RS 領域の終わりの頭の位置から, 次の RS 領域の始めの頭の位置まで, 途中で (特に正面には) 止まらない頭の動き (以下, *hm-RS* と表記<sup>21</sup>) が任意に生じる。

(74) RS を含む領域どうしの接続は, *hm-RS* が標示する<sup>22</sup>。

(75) 行動 RS は, 目的語を含まない。行動 RS は  $v^*[+RS]$  による動作主の人称変化によって引き起こされ, その *c*-統御領域に標示される。(内堀(2018))

(76) 行動 RS は, アスペクト要素や否定辞を含めることができない。(川崎(2021))

(77) 「...引用型のシフトは節レベルの現象...であるが, 行為型のシフトは動詞レベルの現象...」(市田(2005a: 96))

(78) = (70) : PT<sub>1</sub> <sup>\_\_TOP</sup> MANGA READ <sup>引用 RS\_hm-RS</sup> SOMETHING EAT <sup>引用 RS</sup> ‘私は, 「マンガ読むよ～」 「何か食べるよ～」’

(79) (19) に対する私の答え 7 : PT<sub>1</sub> <sup>\_\_TOP</sup> MANGA READ <sup>行動 RS\_hm-RS</sup> SOMETHING EAT <sup>引用 RS</sup>  
 ‘私は, マンガを「読むよ～」 「何か食べるよ～」’

(80) (19) に対する私の答え 8 : \*PT<sub>1</sub> <sup>\_\_TOP</sup> MANGA READ <sup>行動 RS\_hm-RS</sup> APPLE EAT <sup>行動 RS</sup>  
 ‘私は, マンガを「読むよ～」 リンゴを「食べるよ～」’

(81) (19) に対する私の答え 9 : \*PT<sub>1</sub> <sup>\_\_TOP</sup> MANGA READ <sup>引用 RS\_hm-RS</sup> APPLE EAT <sup>行動 RS</sup>  
 ‘私は, 「マンガ読むよ～」 リンゴを「食べるよ～」’

(82) 第一接続要素では, RS は目的語を含む節タイプの RS いわゆる引用 RS でも, 動詞のみのいわゆる行動 RS でもよいが, *hm-RS* に後続する第二接続要素では, 目的語を含む引用 RS が義務的である。すなわち, *hm-RS* の左右には *RS* が隣接する必要がある。

(83) JSL(愛媛方言)における *hm-RS*

➤ *hm-RS*: RS 領域どうしの接続詞であり, 接続要素として [+RS] 素性を選択する。

(84) ... <sup>RS\_hm-RS</sup> [X<sub>[+RS]</sub> ...] <sup>RS</sup> [Y<sub>[+RS]</sub> ...] ...

(85) *hm-RS* は, 接続詞ではなく線状的に続く *RS* の存在によって音韻的に自然に生じる頭の動きでは? →(94)

(86) (19) に対する私の答え 10 : PT<sub>1</sub> <sup>\_\_TOP</sup> MANGA READ <sup>引用 RS</sup> <sub>hn</sub> <sup>引用 RS</sup> APPLE EAT  
 ‘私は, 「マンガ読むよ～」 そして 「リンゴ食べるよ～」’

(87) (19) に対する私の答え 11 : PT<sub>1</sub> <sup>\_\_TOP</sup> MANGA READ <sup>行動 RS</sup> <sub>hn</sub> <sup>引用 RS</sup> APPLE EAT  
 ‘私は, マンガを「読むよ～」 そして 「リンゴ食べるよ～」’

(88) (19) に対する私の答え 12 : PT<sub>1</sub> <sup>\_\_TOP</sup> MANGA READ <sup>引用 RS</sup> <sub>hn</sub> <sup>行動 RS</sup> APPLE EAT  
 ‘私は, 「マンガ読むよ～」 そしてリンゴを「食べるよ～」’

(89) (19) に対する私の答え 13 : PT<sub>1</sub> <sup>\_\_TOP</sup> MANGA READ <sup>行動 RS</sup> <sub>hn</sub> <sup>行動 RS</sup> APPLE EAT  
 ‘私は, マンガを「読むよ～」 そしてリンゴを「食べるよ～」’

(90) (19) に対する私の答え 14 : PT<sub>1</sub> <sup>\_\_TOP</sup> MANGA READ <sup>引用 RS\_hn-STOP(VP)</sup> <sup>引用 RS</sup> APPLE EAT

<sup>21</sup> ここでは, hm は head movement の略。

<sup>22</sup> *hm-RS* が接続詞であり単文には生じないという事実は, 内堀・上田(2022)で報告する。

‘私は、「マンガ読みながら～」 「リンゴ食べるよ～」’

(91) (19)に対する私の答え 15 :  $\overline{\text{PT}_1}^{\text{TOP}}$  MANGA  $\overline{\text{READ}}^{\text{行動 RS\_hn-STOP(VP)}}$  APPLE  $\overline{\text{EAT}}^{\text{引用 RS}}$

‘私は、マンガを「読みながら～」 「リンゴ食べるよ～」’

(92) (19)に対する私の答え 16 :  $\overline{\text{PT}_1}^{\text{TOP}}$  MANGA  $\overline{\text{READ}}^{\text{引用 RS\_hn-STOP(VP)}}$  APPLE  $\overline{\text{EAT}}^{\text{行動 RS}}$

‘私は、「マンガ読みながら～」 リンゴを「食べるよ～」’

(93) (19)に対する私の答え 17 :  $\overline{\text{PT}_1}^{\text{TOP}}$  MANGA  $\overline{\text{READ}}^{\text{行動 RS\_hn-STOP(VP)}}$  APPLE  $\overline{\text{EAT}}^{\text{行動 RS}}$

‘私は、マンガを「読みながら～」 リンゴを「食べるよ～」’

(94) (86-93)が全て文法的であるという事実から、RSとRSの間に、RSでない要素が介在してはならないといった隣接性条件（形態音韻条件）は存在しないことが分かる。

(95) *hn* および *hn-STOP(VP)* は接続要素の統語範疇を選択し、[+RS]素性の有無は無視する。

## 6. おわりに

(96) JSLにおいて、何らかの頭の動きが生起する位置の例 = 話題化要素の後／関係節の後／分裂文の前提句の後／時間の前後を表わす副詞節の後（市田(2005c)）

a. (この)「頭の動きによって、そこに文構造上の境界が存在することが示される」（市田(2005c: 93)）

b. 「この頭の動きは、(中略)「埋め込まれた要素」の境界を示す機能をもっている」（市田(2005c: 97)）

(97) JSL(愛媛方言)における頭の動きである *hn-STOP(NP)* (16), *hn* (43), *hn-STOP(VP)* (67), *hm-RS* (83) は、接続要素についてそれぞれ特定の範疇または素性を選択して、特定の統語構造を標示している。

(98) *hn-STOP(NP)*, *hn* といった JSL(愛媛方言)の等位接続詞がどのような構造に現われているか、具体的に検討する必要がある。→内堀・上田(2022)

## 参考文献

- Chomsky, Noam (2021) Minimalism: Where Are We now, and Where Can We Hope to Go. 『言語研究』160: 1-41. /Cormier, Kearsy (2012) Pronouns. In: Roland Pfau, Markus Steinbach, and Bencie Woll (eds.) *Sign Language: An International Handbook*. 227-244. Berlin: Walter de Gruyter. /Sandler, Wendy and Diane Lillo-Martin (2006) *Sign language and linguistic universals*. Cambridge, UK: Cambridge University Press. /Uchibori, Asako (2018) Some Notes on Syntactic Functions of Finger Pointing in Japanese Sign Language. Invited talk at the Symposium “Evolinguistics Meets Signed Language.” Evolinguistics: Integrative Studies of Language Evolution for Co-creative Communication (MEXT Grant-in-Aid for Scientific Research on Innovative Areas). Kyoto University, 15 December 2018. /Uchibori, Asako and Kazumi Matsuoka (2013) Split movement of wh-element in Japanese Sign Language: A preliminary study. *Lingua* 183: 107-205. /浅田裕子 (2019) 「日本手話における等位接続における特性(1) – 等位接続の同時性における非対称分析」 『手話学研究』28(1): 20-30. /堀内靖雄, 亀崎紘子, 西田昌史, 黒岩眞吾, 市川薫 (2008) 「日本手話におけるうなずきと接続詞の分析」 『電子情報通信学会技術研究報告』108(66): 91-96. /市田泰弘 (1994) 「日本手話の文法と語彙」 『日本語学』13(2): 25-35. 東京: 明治書院. /市田泰弘 (2005a) 「手話の言語学(7)話し手の身体と視線—日本手話の文法(3)「動詞の一致(再考)と指示対象のシフト」」 『月刊言語』34-7: 92-99. 大修館書店. /市田康弘 (2005b) 「手話の言語学(8)頭の位置と口型—日本手話の文法(4)「知覚動詞・思考動詞・非手指副詞」」 『月刊言語』34(8): 92-99. 東京: 大修館書店. /市田康弘 (2005c) 「手話の言語学(10)文構造と頭の動き—日本手話の文法(6)「語順、補文、関係節」」 『月刊言語』34(10): 91-99. 東京: 大修館書店. /川崎典子 (2021) 「視線が作る時空間に産み出される事象—ロールシフトのシンタックスと意味」 慶應言語学コロキウム (2021年3月21日). /岸本秀樹・有働眞理子・眞野美穂・木戸康人・前田晃寿 (訳) (2019) 『英文法大事典シリーズ8 接続詞と句読法』 東京: 開拓社. (Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. London: Cambridge University Press.) /小谷克則 (2009) 「日本手話における等位構造」, 『日本手話学会第35回大会予稿集』, 33-36. /松岡和美 (2015) 『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』 東京: くろしお出版. /岡典栄・赤堀仁美 (2011) 『<文法が基礎からわかる>日本手話のしくみ』 東京: 大修館書店. /内堀朝子 (2018) 「ラベルに寄与する素性について—手話言語研究から」 慶應言語学コロキウム (2018年3月18日). /内堀朝子・上田由紀子 (2022) 「日本手話(愛媛方言)に見られるいわゆる等位接続構造制約違反について」 日本言語学会第164回大会口頭発表. オンライン. 2022年6月18日. /米川明彦 (1984) 『手話言語の記述的研究』 東京: 明治書院.